

# 地理教育における野外学習の効果

——転移力育成の観点から——

美譽志 洋 子

## 1. はじめに

生徒が旅行について書いたレポートを見ると、事象については記述されているが、地域の特色とかかわってとらえた事象の記述が少ない。このことから生徒達の地域への関心や興味がうすいことがわかる。生徒はその時点で身につけている地理的意識をもって地域や事象を見ていると考えられるが、この意識が低い場合には事象のもつ地理的な意味や内容がわかっていないことが多い。そのことが地域に対する興味や関心の程度に影響する理由と考えられる。地理的意識は生徒の学習能力の発達や、学習をとおして次第に高められるとされる。地理的意識を高めるための学習方法としてもっとも具体的かつ効果的と考えられるものに野外学習<sup>1)</sup>がある。生徒に地理的事象に対する興味や関心をもたせるには、そのような学習によってより高度な地理的な見方や考え方を身につけさせ、事象の持つ意味を考えさせ、それまで何げなく見過ごしてきた事象がそれぞれ意味をもつものとして見えてくるおもしろさを実際に体験させることが必要である。筆者は、かつて地理的な見方や考え方が興味や関心につながることにについて、つくば研究学園都市における赤塚地域での野外学習を通して、その学習の結果から、野外学習の意義について明らかにした。すなわち野外学習前・後における生徒の地理的意識についての調査を行い、両者の調査結果の比較分析を行った。分析にあたっては、地理的意識をいくつかの要素にわけ、低次から高次の段階を設けた分析の基準（第1表）を設定して、それを調査結果に見られる見方や考え方に対応して考察した。その結果、野外学習後には、学習前に比べて地理的意識が高まるにつれ興味や関心が深まってゆくことを明らかにすることによって、この体験的な学習の意義を考察した。こうした見方や考え方が学習能力や学力として定着するためには、生徒達が初めて地域に行った時や、実際には行ったことのない地域を学

習する際にも生かされていなければならない。本論文では、茗溪学園の中学校第2学年の行事である「筑波山キャンプ」中に行われた雪入地域又は大志戸地域<sup>2)</sup>の野外学習において、以前行った赤塚地域での野外学習で身につけた地理的な見方や考え方が生かされているかどうか、換言すれば学習の転移がなされているかどうかをとらえ、この学習の効果を確認したい。

## 2. 研究の方法

地理的な見方や考え方の転移の状況は、後述の「(1) 研究資料」すなわち生徒達の班レポート、アンケート、および「ザ・赤塚」をもとに比較検討した。これらの研究資料に見られる地理的な見方や考え方は、地理的意識と共通するものである。地理的意識の分析については、前論文で設定した「(2) 地理的意識の分析の基準（第1表）」を用いた。学習の転移の状況を判断するために、「(3) 転移の状況を把握するための視点」に立って、転移の結果と考えられること、生徒自身が感じた地理的意識の変化および地理的な見方や考え方の転移の具体的事例について考察した。

### (1) 研究資料

班レポートは事後学習3時間のなかで班ごとにまとめさせたもので、巡検ルート（第2図）に設けた八つの地点についての観察内容や調査内容を、全班員がそれぞれ代表者となって記述している。記述される事柄は地点ごとに異なるが、記述のしかたによって担当者の地理的意識の程度、知識、資料活用の力、地域への興味や関心などを推測することができる。

アンケートの内容（本論末に示した資料1）は、①巡検ルートの地点の仕うち、五つの地点における観察内容 ②巡検のし方についての感想と改善すべき点 ③野外での学習の利点と欠点 ④野外学習の成果についての感想 を記述または選択させたものである。これにより全生徒についてのおよその地理的意識の程度、野外学習の経験か

ら見た学習方法についての感想、野外学習によって生徒自身が地理的な見方や考え方がどう変わったと感じているかなどについて知ることができる。

赤塚地域での学習結果を生徒がまとめた「ザ・赤塚」は、全体のテーマ「赤塚はどのような所か？」に対する具体的なテーマ①「赤塚の自然と植生」②「赤塚の耕地の利用」③「なぜ赤塚にバキュームカー・清掃車があるのだろうか」④「赤塚の伝統的なもの」⑤「東宝ランド（新興住宅団地）はなぜできたか」などの五つの班の学習結果である。また各テーマ、例えば③「赤塚の伝統的なもの」班では、生徒の興味に応じて歴史・家屋の型・石造物についてそれぞれ担当者がまとめている。それにより、担当した生徒の地理的意識、知識、資料活用能力、地域への興味や関心などを推測することができる。

#### (2) 地理的意識の分析の基準（第1表）

研究資料の中に記述された事柄によって、それが単なる事実の把握によるものか、関係的な把握によるものかなど記述者の意識の段階（認識能力）や、興味や関心の深まり（態度的能力）をある程度知ることができる。地理的な意識は一般に具体的なものから抽象的なものへ、単純なものから複雑なものへと深まるものであり、地理的事象の把握の仕方による低次から高次の段階へと移るものである。そのように考えると、生徒の地理的意識は地理的事象を単なる事実として把握する段階、地理的事象を動的・発展的にとらえたりそれを成立させている原因や意味内容を把握したりする関係の把握の段階、さらに地域的広がりの中かでとらえようとする地域的把握の段階へすすむと考えられる。ここでは、第1表のように地理的意識を地理的な見方や考え方と対応するものとしA～Fの6つの要素にわけたうえで、さらに事象のとらえ方によってAの対象空間の区分の仕方は2段階、Bの地理的意識の段階は①から⑦までの7段階<sup>3)</sup>に分けた。

#### (3) 転移の状況を把握するための視点

地理的な見方や考え方の転移の状況を把握するために、次の視点から考察した。すなわち、班レポートやアンケートにおいて、①赤塚地域の学習が意識されている場合、②地理的意識の段階についての赤塚地域の学習経験者と非経験者の比較、③生徒自身が感じた学習後の地理的な見方や考え方

の変化についての赤塚地域の学習経験者と非経験者の比較、および班レポートと「ザ・赤塚」において④地理的な見方や考え方が具体的にどのように転移しているか、について検討した。

### 3. 雪入地域又は大志戸地域（第1図）における野外学習の概要

#### (1) 位置と地域の特徴——雪入地域について

学園所在地から北北東の方向、道のり約20kmの所に、キャンプ地・県立中央青年の家がある。ここは筑波山から南東方向にのびた標高180mの尾根上で、野外学習地域として設定した雪入地域はこの尾根の北側にある。また、大志戸地域はこの尾根の南麓緩斜面上に位置する。地理巡検当日は地学巡検<sup>4)</sup>と組み合わせて行うことから、各班はこの二つの地域のうち、地学巡検で選択した露頭<sup>5)</sup>に近いほうの地域をとったため、30班のうち25班までが雪入地域を対象とすることとなった。

雪入地域は尾根の北側にあたる雪入山を背にして東に開いた小扇状地上にあり、千代田村の北西端に位置する、総戸数40戸、人口200人の小集落である。縄文時代後期の雪入遺跡など千代田村でも最初に文化の開けた地域である。農地は比較的少なく米作のほかには石材業・山林業もおこなわれていたが、最近では生活様式の変化により薪炭業がふるわなくなり、石材業も採石が行われなくなったため、柿や梨等の果樹栽培に力がそそがれるようになった。

#### (2) 野外学習の概要

〈この学習の目標〉

- ・ 地図を読み活用することができる
- ・ 事前学習と野外観察によって、事象の持つ意義を関係的にとらえたり、地域的にとらえたりする、地理的な見方や考え方を身につける
- ・ 地域や地理的事象に関心をもち、その特色を理解する

〈対象〉学年全員230（男115人、女115人）

〈指導計画〉（12時間配当）

この学習は、本校中学校第2学年5クラス230人を対象に、学年行事という形で地学巡検と合わせて9月末に3泊4日の「筑波山キャンプ」中に行ったものである。対象地域は雪入または大志戸地域である。学習形態は、1クラス7～8人か

第1表 地理的意識の分析基準…上山(1972)・朝倉(1968)を基に作成

実際の文章には次のように対応させた

A 対象空間の区分の仕方 (例) 赤塚側は畑が多く、開発が進んでいない

1 個体(点)的把握 E B3b Cd B2 B4⑤  
2 線・面的把握 B4⑤b

B 選んだ対象の意味付け方・組み立て方(地理的意識の段階) 五段階目(5点)

- 地理的意識の七つの段階
- 1 ①個体的(個々に独立した存在として) ・木がある
  - 2 ②数量的(個数や量として) ・家が多い
  - 3 ③分布的(一定の広さをもった場所としての認識)
    - a 絶対位置(方位など) ・北には山、南には川
    - b 相対位置(上下、左右など) ・家の隣に畑がある
    - c 立地状態 ・山と平野の間に町がひらけている
    - d 分布状態 ・台地の上に住宅が密集している
    - e 形状(大きさ・色・形)
    - f 高低
  - 4 関係の把握…事象の関係を考える
    - ④ a 対比(具体的な事象の比較) ・道のこちら側と反対側では
    - b 時間的变化(動的、発展的) ・だんだん家が建ちはじめた
    - ⑤ a 相関関係(相互の関係) ・家の形から見ると農家らしい
    - b 因果関係(原因と結果の関係) ・交通量が多いのでスモッグが発生
    - c 比較(抽象的な事象、他地域との比較) ・東京に比べ家が点々と…
    - d 概念(特に抽象的な意味をもたせている) ・開発がすすんでいる
  - 5 地域的把握…文章全体で表現される場合が多いためここでは例を省く
  - ⑥ a 地域的まとまり(共通性、統一性などその場所としてのまとまり)
  - b 他地域との比較(地域相互の比較、関連)と結びつき
  - ⑦ a 地域的特色(地域固有の性質、その地域らしさ)
  - b 地域の変容(他地域との関わりや地域を構成する事象および事象相互の関連によって変化する地域的特色)

C 興味と関心の方向(選ばれた対象の内容)

- a 自然に関する b 居住の様式・集落の携帯に関する c 人口に関する  
d 土地利用に関する e 生産活動に関する f 交通に関する g 環境に関する

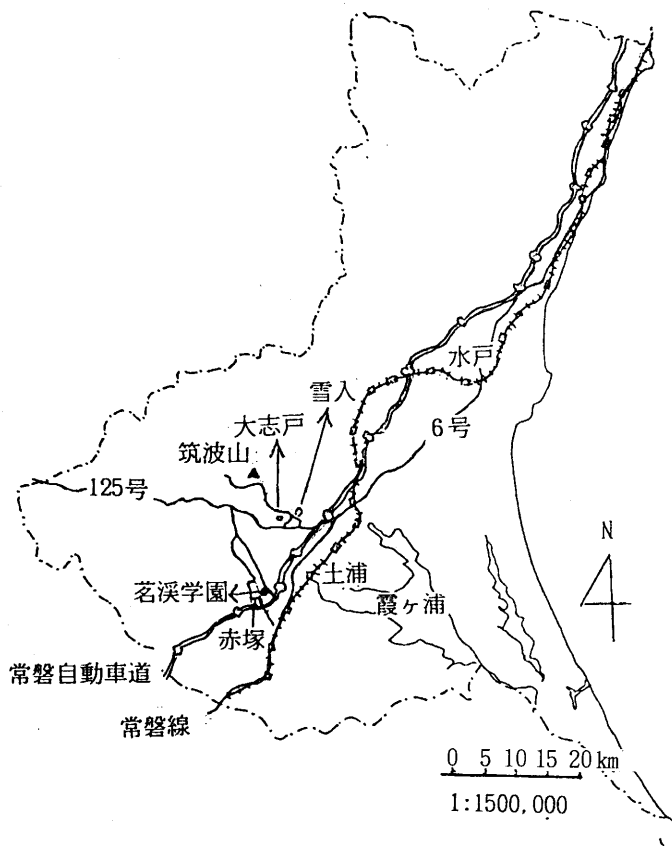
D 地理用語(興味・知識・概念のあらわれ)の使用 ・都市化

E 地名(関心・知識・地域的概念のあらわれ)の使用

F 問題意識(興味・関心・地域的把握・共感的理解)

らなる6班による班学習で、そのうち班により赤塚地域の学習経験者18人がランダムに含まれている。キャンプ前に事前学習6時間、キャンプ時の野外における巡検3時間、キャンプ後に事後学習として3時間をあてた。これらの学習内容は次に

述べるとおりである。なおこの野外学習は、第2学年の地理カリキュラムにおける「身近な地域」の学習に該当し、続いて学習される日本の諸地域の一部としてとらえている。



第1図 学園所在地と野外学習地域

#### 〈学習内容〉

①事前学習…6時間・行事中の班（各7～8名）単位で学習する。

- ・ いろいろな地図及び地図のきまりと読図、巡検地域（雪入と大志戸地域）の位置
- ・ 巡検地域の自然と土地利用
- ・ 巡検地域についての統計と文献資料の整理
- ・ 巡検地域の概要の把握
- ・ 地域の選択（雪入または大志戸地域のいずれか）と観察地点および観察事項
- ・ フィールドノートの書き方とレポートのまとめ方

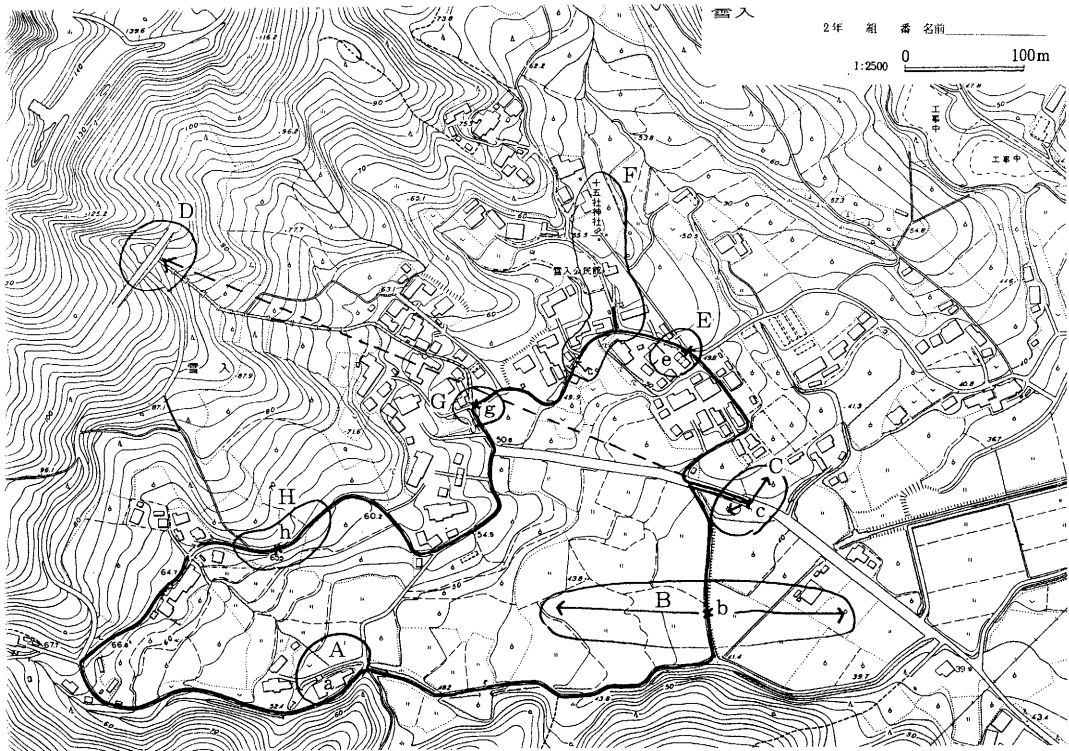
②雪入または大志戸地域における観察を中心とした野外における巡検…約3時間・班学習

第2図のような約1.6kmの巡検ルートにしたがって景観を観察しながら歩き、特にA～Hまでの八つの地点において観察したことなどをフィー

ルドノートに記述させた。フィールドノートにはあらかじめ指導しておいた次のような観察事項のまとめを貼らせた。

雪入の八つの観察地点とそこでの観察事項

- A 牛飼育施設（地図中aの牛小屋）  
…牛の種類、頭数、施設の様子
- B 水田（地図中bの付近を中心に観察する）  
…水田の形態と地形、減反政策
- C 果樹園（地図中cの付近を中心に観察する）  
…果樹の種類、樹種による仕立て方の違い、樹種と分布・労働力
- D 採石場とコンクリート製構築物（遠景）  
…山肌、自然に及ぼす影響、なぜ採石場があるか、コンクリート製構築物は何か
- E 民家（地図中eの長屋門）  
…スケッチをする、このような門は村の中に幾つあるか、屋根型、付近の農家について



第2図 雪入地域での巡検ルートと観察地点

はどうか

- F 村の中心（地図中fの付近を観察する）  
…地図記号と実物、石像物・神社・郷倉、この場所の村における役割
- G 温泉（地図中gの取水地）  
…設備と水の性質についての説明板
- H 急斜面の土地利用  
…作物の種類、畑のつくり

#### ③事後学習…3時間

地点ごとの観察記録は各班員が代表して担当し、必要に応じて担当者を中心に調べ、学習や資料作成などを行った。この記録とルートマップ、感想をファイルにまとめ、記録者明記のうえ班のレポートとして提出させた。

## 4. 結果と考察

班のレポートやアンケートの記述をもとに、学習能力の転移の状況を把握するために、「2. 研

究の方法」で述べた四つの視点から、次の(1)～(3)について考察した。

- (1) 学習能力の転移の結果と考えられること（視点のうち①・②に関する事）

地名や地理的用語は知識や概念形成とかかわっていると考えられる。そこで地理的用語に着目して考察したのが第3図の中に示した地理用語記述者率である。赤塚地域での学習経験者は学習によって地理的意識が確実に高まると同時に地名や地理用語を多用するようになっている。例えば、班のレポートとアンケートのなかで「赤塚」という地名を用いて赤塚地域での経験を生かしている生徒は、経験者のうち46%にも及んでいる。このように赤塚地域での学習経験者は非経験者に比べて地名や地理的用語を用いる割合が高く、新しい知識や概念を表現するためにこれらが活用されていることから、赤塚地域での学習で身につけたことが雪入地域の学習において定着していることを示すと考えられる。

また、地理的意識の深まりについて経験者と非経験者を比較したのが第3図の中に示した地理的な見方や考え方の到達度である（アンケートの質問1の答えより作成）。この到達度は、観察地点の記述に見られる地理的意識の程度のもっとも高いものを、第1表中にある意識の段階を示すBの七つの段階<sup>3)</sup>に対応させて1～7点までの得点をつけ、これを五つの地点について総合した数の、最高得点（35点）に対する割合である。この図に示されるとおり、赤塚地域の学習経験者において到達度は高く、地域的な把握のような高度な把握の仕方は、地理的意識の段階が高いことを示しており、明らかに地理的な見方や考え方が定着しているといえる。

雪入または大志戸地域の野外巡検の方法については、第3図の改善を求める者の割合（アンケートの質問2の答えより作成）に見られるように、赤塚地域の学習経験者の71%、非経験者の50%が今回の方法を改善したほうが良いと答えている。改善すべき点としては、経験者において、地域の比較ができるように複数地域の学習を希望するなど地理的な見方や考え方にかかわる意見が多かったのに対して、非経験者は時間の延長など直接的な見方や考え方に結びつかない意見が多かった。

以上のことから、赤塚での学習経験者がそこでの学習経験を前提として雪入または大志戸地域での学習と比較したりしているだけでなく、地理的意識が定着し、多面的な考察が身についていることがわかる。

## (2) 生徒自身が感じた地理的意識の変化（視点の③に関すること）

雪入または大志戸地域での学習後の知識・地理的な見方や考え方や技能について、生徒がどのよ

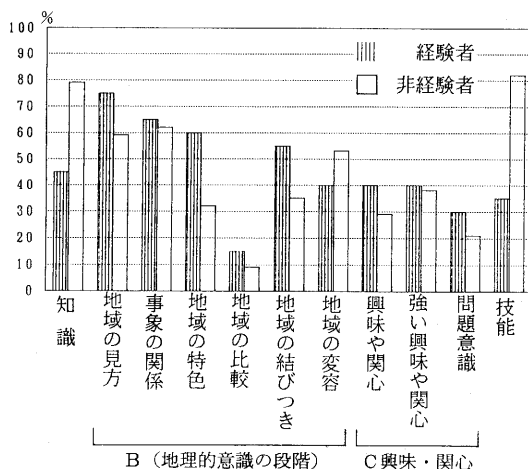


第3図

うなことが身についたと感じているかを示したのが第4図（アンケートの質問4の答えより作成）である。図中のそれぞれの事項は左から、知識、地理的意識のB④からB⑦とC興味・関心、および技能（3頁第1表）の順に配列してある。そのうち地理的意識の段階に関する6つの事項については、漠然とした地域への関心から事象の関係（地理的条件）、地域の特色、他地域との共通性、地域相互の結びつきと関連、地域の変容へと図の左から右に地理的な見方や考え方が次第に深まってゆくことを示している。生徒には図中の各事項のうち五つを選ばせた。第4図は、それぞれの事項ごとに赤塚地域の学習経験者と非経験者について、それぞれの総数に対する回答者の割合を表している。図から見られるように、赤塚地域の学習経験者と非経験者には大きな違いがある。すなわち、赤塚地域の学習経験者は地理的な見方や考え方の深まりに関する事項について生徒自身が力がついたと感じており、地域に対する興味・関心が高いことが分かる。一方、非経験者は、知識や技能面において力がついたと答えている者が多い。これは非経験者が経験者ほどに地理的な見方や考え方が身につけていないため、事象の意味や内容が把握できておらず、そのことが地域への興味や関心が低いことにつながっていると考えられる。

## (3) 地理的な見方や考え方の転移の具体的事例（視点の④に関すること）

第4図における事項のうち主なものについて、地理的な見方や考え方の転移の具体的事例を、雪



第4図

入または大志戸地域での学習の結果である班レポートから取り上げ、赤塚地域での学習のまとめである「ザ・赤塚」(省略)と比較して考察した。

他地域との比較、地域の特色、問題意識に関しては、それらの深まりがよくあらわれているものとして、本論末の資料2に示したB君の例がある。大志戸地域での学習をまとめたB君の班レポートでは、屋根型に注目し、大志戸地域だけでなく赤塚地域、さらには近くの阿の山地域、関東地方や全国へと狭い範囲から広い範囲に視野を広げて考察しており、この地域の特色をとらえるとともに他の地域との共通性に気付いている。またこの地域の屋根型になぜ入母屋が多いのかを考えたり、隣接地域どうしてなぜ屋根型が違うのかといった問題意識を持ったりしている。B君は赤塚地域での学習においても屋根型に着目していた。すなわち、その時点で全国、関東、関西の屋根の型の傾向について知識を持っており、そのなかで赤塚における屋根型の特色をつかむことができていたが、それが大志戸の学習においては上述のように著しい地理的な意識の深まりとなって表れている。

次に、地域の結びつきについての意識の深まりがあらわれているものとして本論末の資料3に示したK君の例がある。K君は、雪入地域での学習をまとめた班レポートにおいて牛舎で肉用黒毛和種を詳細に観察し、食用とされる牛に対して深い同情を示しながら、野外学習後自分で調べ学習を行い日本の肉用牛や飼育農家が自由化のなかでどのような課題をかかえているかを考えようとしている。K君は、赤塚地域での学習において新興住宅団地の聞き取り調査を行い、その団地がつくば市と結びついているという予想と異なり、ベッタウンとして東京と結びついていることに気付いた。雪入地域では聞き取りを行っていないが、赤塚の経験から広い地域を対象にした地域の結びつきについて予測し、それをもとに調べ学習を行ったものと考えられる。

地域の特色や比較、および地域の変容については、それらの意識の深まりがあらわれているT君の例を本論末の資料4にあげた。T君は、雪入地域での学習をまとめた班レポートにおいて道の両側の水田観察を行い、赤塚学習で得た結果をふまえて両側の田の形の違いから開墾の時期の違いに着目している。そして、なぜこの時期の違いが生

じたのかといった、新たな問題意識をもつようになっている。またT君は、赤塚地域での学習では場所による作物や土地利用の違いがあることを調べ、それらが時代とともに変化していることに気付いていたことを生かしている。

事象の関わりについて問題意識を深めているものとしてN君の例を本論末の資料5に示した。N君は、雪入地域での学習をまとめた班レポートにおいて統計に見られる兼業の増加、減反の進展、人口の増加などの特色をとりあげて、それらが互いにどのように関係しあっているかを考えたうえでその問題点を指摘し、それらを雪入での聞き取りや景観の観察のなかで確認している。N君は、赤塚地域での学習において統計や聞き取り調査から統計に見られる矛盾を発見し、それを追求する過程で農業の特色や問題点をつかんでいった経験をもっている。雪入においてはこの経験を生かし農業の特色や問題点があるのではないかという前提をかかげ、それを聞き取りや景観観察のなかで確認している。

以上の四つの例に共通することは、とりあげている地理的事象は異なっている、興味の持ちかたや地理的な事象に対する見方や考え方に赤塚地域の学習を生かしていること、赤塚地域を含め広い地域に視野をひろげて考察していること、複雑な事象の関係や多面的な考察が深まっていること、興味や関心から新たな問題意識を持つようになっていることがわかる。

## 5. まとめ

生徒に地域や地理の学習に興味や関心をもたせるには、彼らの地理的意識を深める必要がある。その学習方法として最も効果的と考えられるのが野外学習である。前述したように、筆者はかつて野外学習後には学習前に比べて地理的意識が高まるにつれ興味や関心が深まってゆくことを明らかにした。地理的な見方や考え方が能力や学力として定着するためには、生徒が初めて地域に行った時や実際には行ったことのない地域を学習する際にも再現されていなければならない。本研究では、赤塚地域での学習を経験した生徒が、この野外学習で身につけた見方や考え方を他の地域すなわち雪入または大志戸地域での学習において生か

しているかどうか、それらの学習能力の転移がなされているかどうかについて非経験の生徒との比較や経験者自身の意識の深まりを分析し、さらに学習能力の転移の具体的な事例をあげて論述した。赤塚地域での学習経験者は、興味の対象については以前の赤塚地域の学習と同じであること、地理的な事象に対しては、前の学習と同じような見方や考え方をしようとしていること、ただし、赤塚を含めて広い地域が比較の対象になっていること、見方や考え方が深まり、多面的で重複されていること、新たな問題意識をもつようになっていくことがわかった。これらのことは、以前行った赤塚地域の野外学習で身につけた見方や考え方を別の地域での学習において生かしながら、さらに態度形成に発展させていることを意味している。

学習によって身につけた能力が他の事象や地域にも転移され、学習において求められる態度の形成がなされるようにすることは、地理教育の重要な目的の一つであり、その意味で野外学習の地理教育における効果は大きいと考える。

本研究をまとめるにあたり、御指導を賜りましたつくば国際大学・篠原昭雄教授ならびに茗溪学園の生徒の皆さんに深く感謝いたします。

## 注

- 1) 本研究での野外学習は、事前学習・野外における巡検・事後学習を含むものとしている。
- 2) 同じ日に行われる地学巡検の露頭に近い地域について

て学習させた。

- 3) 一般に中学校段階で発達するとされる地理的意識の要素Bの1①個体的把握から5地域的把握⑦までをさす。
- 4) 野外巡検当日は、地学巡検として露頭において岩石の調査・採集を行い、地理巡検として決められたルートにしたがって景観を観察しながら歩くことが課せられている。
- 5) 地学巡検の露頭は複数あり、そのうち幾つかを無理のない程度に選択する事となっている。

## 文献

- 朝倉隆太郎(1985): 地域学習の意義.『社会科教育と地域学習の構想』朝倉先生退官記念出版会, 384P.
- 上山英昭(1972): 地理的文野においておもに態度的能力を対象とした評価の実際. 朝倉隆太郎編『地理的分野の評価事例』明治図書, 281P.
- 篠原昭雄(1983): 地域教材活用の意義.『中学校 社会科授業研究1—地域教材を活用した地理的分野の授業』明治図書, 171P.
- 玉村稔(1971): 思考学習とは. 社会科教育, NO. 84, 5—7.
- 広岡亮義(1973): 環境刺激としての教材.『学習論—認知の形成』明治図書, 186P.
- 美誉志洋子(1993): 地理教育における野外学習の意義—地理的意識育成の観点から. 筑波社会科学研究, 第12号, 1—10.



資料1 アンケート

地理巡検について

1. 地点B・C・D・F・Hについて観察した結果どのようなことに気付きましたか。

B：両側の水田の比較観察

C：果樹園（樹種の違いや周辺の作物との関係）

D：採石場跡の遠景観察

F：火の見やぐら・石像物・公民館・神社などの集中しているようす

H：急斜面の畑の景観

2. 地理・地学巡検についてあなたの考えを書いてください。

〔地理〕

ア今回のような方法で行うのが良い

イ方法を工夫して行ったほうが良い

理由

工夫

ウ特に行う必要はない

〔地学〕

ア今回のような方法で行うのが良い

イ方法を工夫して行ったほうが良い

理由

工夫

ウ特に行う必要はない

3. 野外での学習（学校での学習に対して）の良い点と悪い点はどのようなことですか。

良い点・

悪い点

4. 野外学習を行って身についたと思われることを次のア～サから5つ選んでください。

ア雪入について新しい知識がふえた

イ地域の見方が変わったような気がする

ウ雪入で観察されたある特定のことがら（例えば果樹の分布、石像物など）はいろいろな関わりの上に成り立っている（存在している）ことに気付いた

エ雪入と他の地域（自分の知っている地域や大志戸）と比較することによって、雪入の特色がわかった。

オ雪入と他の地域を比較してこの地域の特色ばかりでなく他地域との共通性に気付いた

カ雪入と他の地域との結び付きや関係がわかった

キ雪入が変化（産業、人々のくらしなど）しているのを感じた

ク雪入という地域について少し興味や関心がでてきた

ケ雪入についてもっと勉強がしたくなった

コ雪入における社会問題に気付いた

サ大きな地図や統計等の資料を読む良い勉強になった





○区画が乱れたい

地図を見れば一目で分かるが、東側はくらばる。

田んぼ一枚一枚の形が乱れたい。

※赤塚と原新田の場合からすると、この側は

東側にくらばる昔から農耕が行なわれてきた

と思われる

○区画が整理されたい

西側にくらばれば遠い距離がある。

再び「赤塚と原新田の場合」からすると、この側は

西側にくらばる最近農耕が始まった所だと

思われる

※ 赤塚の集落は区画が乱れた

→昔から農耕をしてきた〈伝統的農耕〉

原新田の集落は区画が整った

→最近(江戸時代末)農耕はじめて

〈近代的農耕〉

○東側と西側の類似点

雪入というのは薪炭田にある落石の2" 地面の土石

の粒子があらわなというところ、水はけがよいといえる。

→と表れているように、水路のそばにはあるが、水はけ

がよいところから、地味にみえて、うるまな味がある。

しかし、このよな水はけのよい所と、水は味がある

というわけ、雪入の地味味と、水はけと、

〔感想〕

地学の観察に時間取って、十分調査ができていない

残念だった、もう少し時間があれば、東側と西側になぜ

農耕が、始まる時期が、ずれたのかを調べたい。

資料 5 班レポートよりN君の例

2、予想以上に減反が進んでいることに気づいた  
ある親切なおじさん(調査地点Aの牛の飼いま)  
によると(聞き取り調査)

Q「やっぱり減反とかありますか?」

A「そうだね、うちも毎年かなり減反してるよ」

Q「どんな作物に変えるんですか?」

A「かき、なし、くいが多いねえ」

Q「お米から果樹園がらの収入はどちらが多いですか?」

A「家によっちゃうけど、うちの場合は果樹園の方が  
多いねえ」

又、赤塚の場合は自給分を除く全体の30%  
減反ということでは

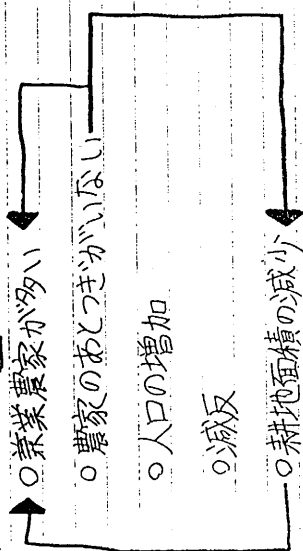
けれど「減反」って東京の方だけだと思っただけ、こっちの方も減ってるね、  
本田を回休させると、元にもどすのは5年も6年もかかる  
何らかの理由で輸入がストップした場合は考えと  
やたらに減反するのも困りますからね。

かんじ中島

KYOKUO

まとめの会を開き、雪入の特色、問題点などを  
出し合い、それについて話し合った。

問題点 図1



2、農家のあつぎがないので図1、図2のようになる

図2

子供が農家をつぎたぐない⇒社会に勤める

人生が不足する<=>兼業農家

↓

耕地面積の減少

図1

学校でいくら輸入農産物は危険だと教えられても  
(食料) かんじんの国産品がなくなっちゃう……

かんじ中島  
担当